



---

# 第1章

## メディアとしての文房具

### —歴史・定義・機能—

福永 祥子

---

#### 目次

1. はじめに
2. 文房具の歴史とそこから見える定義
  - 1) 文字と筆記
  - 2) 民主化される筆記用具と広がる文房具の世界
  - 3) 文房具の定義
3. メディアとしての文房具
  - 1) 「メディアはあらゆるものの拡張である」「メディアはメッセージである」
  - 2) 「人類は3つの時代を生きてきた」
  - 3) 文化メディアとしての文房具
4. おわりに

#### 1. はじめに

今、あなたは当たり前のように文房具がテーマの本書を手に取り、この文章を読んでいる。そんなあなたの懐にはこれまた当たり前のようにペンの1、2本が収まっていることだろう。生後間もなくはクレヨンで絵を描き、識字率ほぼ100%となって久しい現代人らしく、小学校に上がる頃には鉛筆で文字を書き始める。そしてこの世を去るときには遺言書をしたためるために筆をとる私たちは、ゆりかごから墓場まで当たり前のように文房具と接し続ける。しかし、本当に文房具とは「当たり前」の存在なのだろうか。本稿は、文房具を「文化と歴史の覗き窓」としてメディア論を絡めながら捉えなおすことにより、新たな定義・考え方を提案するものである。

#### 2. 文房具の歴史とそこから見える定義

##### 1) 文字と筆記

人類や世界の歴史はこれまでさまざまに語られてきたが、文房具というテーマで古代から現代までを貫いたものはまだ目にしていない。本節では世界史を文房具という視点でみていくことで、文房具の歴史をまとめようと思う。

文具史を語る上で欠かせないのが、文字の発明と、それに伴い生まれた「書くもの／書かれるもの」である。本章では「書くもの／書かれるもの」をともに「筆記用具」とみなし、印刷文化史の諸文献（庄司、1980・1982a・1982b、杉浦、1994、鈴木、1976）を参考に論を進めていくこととする。

文字が生まれるまで、人の意思疎通は音声や絵・図像によって行われていた。その絵・図像は絵文字や表意文字、表音文字へと変化していった。表音文字であるアルファベットが世界で初めて使われたのは紀元前 1600 年頃とされる。文字の発生に伴い、筆記用具も誕生・進化し始める。紀元前 5000～3000 年ごろの古代エジプトやメソポタミア地方では粘土板にスタンプのように絵や文字を刻んだり、葦の茎や金属の尖端などで楔形文字を刻んだりしていた。ヒエログリフが刻まれたロゼッタ・ストーンがその好例である。紀元前 2500 年ごろには古代エジプトでパピルスが発明され、これが英語の **paper** の語源になっていることは有名な話だ<sup>i</sup>。紀元前 1300～1100 年頃の中国では亀の甲羅や獣骨に文字が刻まれ、占いに使用されていた。その後も竹をペンのように使い木簡・竹簡が用いられたり、絹布に文字が書かれたりした<sup>ii</sup>。紀元前 300～100 年ごろにヨーロッパ・地中海周辺で発明された羊皮紙は以降中世まで重要な筆記用具であった。この一連の流れの中で触れなければならないのが紀元後 105 年、後漢の中国で宦官・蔡倫によって行われた製紙術の改良である（紙はそれ以前に存在したとされている）。朝鮮には 593 年に伝わり、日本には高句麗の僧・曇徴が 610 年に伝えた。日本ではその後、聖徳太子の時代に独自の改良が加えられ、和紙が作られる。西には 751 年タラス河畔の戦いを機に、シルクロード沿いに製紙法が伝えられたという。700～800 年代にはアラビアに製紙工場が建設された。そしてヨーロッパ全土まで製紙術が伝播するまでには 1000 年以上の年月がかかっている<sup>iii</sup>。

表音文字という比較的簡単な文字方式が生まれ、それとともに現在の紙にあたる「書かれるもの」の改良が進んだことは人間の文化にとってひとつの革命だった。それまでは、宗教的な秘伝しか記録されず、それゆえ字を書くという行為は書記や司祭といった特定階層の専有物であったが、文字と筆記用具の発明・改良で海洋商人などの一段低い階層まで降りてきたのだ。さらに、書き言葉が以前とは比較にならない規模で使用されるようになったことで、書写が労苦と化し、結果的に書くという行為は奴隷のものともなった。一方で言葉・言語も発達を続け、奴隷や一般庶民が書いている言葉と特定の上級階層が用いる言語は別のものとなった。かつ、改良が進んだとはいえ、まだ筆記用具は庶民が気軽に手に入れられるほど安価なものではなかったため、宗教や政治などの重要な知識は長い間特

権化していた。

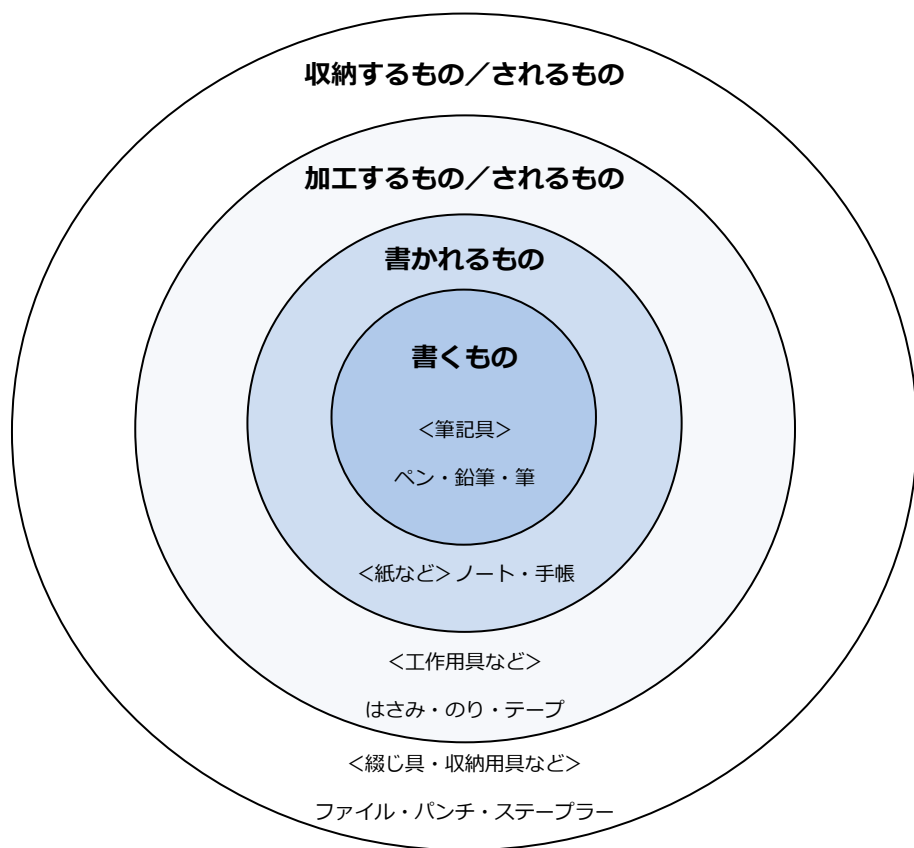
## 2) 民主化される筆記用具と広がる文房具の世界

特権化されていた言葉≒知識を解放する重要な出来事が15世紀中ごろのドイツで起こる。グーテンベルクによる近代金属活字印刷技術の完成である。これにより、聖書のドイツ語翻訳と印刷が活発になった。そして聖書を主とする書物の大量印刷が行われるのと同時に紙も改良され、羊皮紙から現在の紙へと変化していった。中世ヨーロッパではキリスト教が政治と深く結び付き、権力と知識を握っていたのは、当時の聖書の原本(ラテン語≒古語。庶民は読むことが出来ない)を読むことが出来た宗教関係者や一部の学のある者のみであった。ところが印刷技術が完成したことで、多くの人が易く聖書をはじめとする書物=知識を手に入れることができるようになり、その流れの中で起こったのが宗教改革だった。説教=音声中心のトップダウンの宗教・政治・文化が聖書=文字中心の民主的な宗教・政治・文化へと変わっていったのだ。このころ、鉛筆の原型がイギリスで発明され、その約100年後、1600年にはドイツ・ニュルンベルクで鉛筆が製造され始め、現在のステッドラーなどで改良が重ねられていき、筆記用具が一般市民の物となっていった。近代国家のキーワードは民主化であるが、時代の変化と同期するように筆記用具も民主化されたのだ。道具と知識が民主化されたことで、一気に人類の扱う情報量は増えた。それまで紙一枚で足りていた知識はその量=枚数が増え、いつしかノートや書物となり、ノートや書物といった紙モノを切り貼りしたり整理・収納したりするための道具が、それまであった別用途の道具から改良されていった。例えば、日本の糊メーカー「ヤマト」はもともと薪炭業を営んでいた。薪炭は紙袋に入れて販売されていたのだが、その袋を閉じる糊を改良していく中で糊メーカーとなった。筆記用具から始まった文房具はビッグバンで始まった宇宙のごとく、その世界を広げ続けている。

## 3) 文房具の定義

ここで、文房具の定義に移ろう。これまで述べてきた歴史的観点から文房具の世界を見てみると、文房具は「書くもの」という筆記用具の存在から始まっている。そして、「書くもの」と「書かれるもの」の存在は表裏一体であり、それらを「加工するもの」、「加工されたもの」を「収納するもの」といった二面性のある円環的な関係性が文房具には存在する。よって、本稿では「図1の円環図の内側に存在するもの」を文房具の基本的定義とする<sup>iv)</sup>。なお、この定義のみとすると生じてしまう疑問・矛盾(例: スチールラックは文房具なのか?)を解消するため、「シーンによる定義」も合わせて付け加える。すなわち、図でより中心に近いものをA、外側のもの(行為)をBとした時「AをBする」関係が成立す

るもの・シーンに限って任意の対象Xを文房具とする。つまり例えば、スチールラックは「書くもの／書かれるもの／加工するもの／加工されるもの」を「収納する」シーンでのみ文房具と定義される。



【図1】 文房具の定義円環図  
(図内細字は具体的な文房具名称を例示したもの)

### 3. メディアとしての文房具

ここまでで、文房具は歴史や文化を覗き見ることができるメディアであること、昔から存在していた「書くもの／書かれるもの」という筆記用具が現代の文房具の発展にも通じていることを感じてもらえたと思う。ところでいったい、メディアとしての文房具はどんな存在と言えるのだろうか。ここで参考になるのがマーシャル・マクルーハン（1991～1980）のメディア論である。

マクルーハンはカナダ出身の文明批評家で、1964年の著書『メディア論』（原題：Understanding Media: the Extensions of Man）などで多様なメディアの本質と機能を考察した。以降、マクルーハンの言説から3点ほど引用して論を展開する。

#### 1) 「メディアは人間の拡張である」「メディアはメッセージである」

マクルーハンが注目された1960年代、テレビという新しいメディアが大きな力を持ち始めていた。彼はこの事に注意を呼びかけていた。テレビを「臆病な巨人」だと発言し、その力について知る必要性を主張していた。ルイス・ラバムによれば、マクルーハンは「私たちは自分が見つめるものになる」「私たちは道具を形作り、その後、道具が私達を形作る」と考えていたという（ゴードン、2001：50）。マクルーハンはメディアを「何かを気づかせる」媒介物ではなく「何かを起こす」媒介物と見ていた。私たちは、メディアとは新聞・ラジオ・テレビなどのニュースや情報のソースと考えているが、マクルーハンにとってメディアとは「われわれ自身の拡張したもの」（マクルーハン、1987：7）を意味していた。例えば、自動車は人間の足の拡張であり、服は皮膚の拡張、コンピューターはヒトの中枢神経組織の拡張であり、住居は肉体の体温調節メカニズムの拡張であるため、それぞれがメディアであるといえる。

そして、同時に彼は「メディアはメッセージである」（マクルーハン、1987：7 - 22）と言い放ち、「メッセージ」を再定義した。私たちは「メッセージ」を「内容」や「情報」といった意味にしか定義しないが、それではメディアの最も重要な特徴のひとつを見落とすとマクルーハンは指摘する。「メッセージ」とは、人間関係や行動の方向と機能を変える力である。そこで彼は、ひとつのメディアの持つ「メッセージ」を、社会や文化においてそのメディアが引き起こす規模・速さ・パターンの変化として再定義したのだ（例えば「自動車」という「メディア」は「ヒトの移動速度を上げ、行動範囲や人間関係のあり方を変化させる力」という「メッセージ」を持つ）。

「メッセージ」を再定義する理由はもうひとつある。「内容」は幻影となったり、メディア同士の相互作用を覆い隠したりするからだ。メディアは組みになって機能する。一つのメディアは別のメディアの内容になっている。そのメディア

はさらに別のメディアの内容になっている。例えば、電信の内容は活字であり、活字の内容は書き言葉、書き言葉の内容は話し言葉である。話し言葉は私たちの思考を拡張するメディアだが、書き言葉の内容へと変化したとき、視覚的な記録として残り存在し続けることで、「任意の固定化された情報に不特定多数の人間が繰り返しあたることができる」という情報に対する新たな尺度を生み、話し言葉である時以上に多くの人間・多くの社会に影響を与えるというメッセージとなる。要するに、いかなるメディア（＝私たち自身の拡張したもの）の場合でも、それが個人・社会に及ぼす結果というものは、私達自身の個々の拡張（＝新しい技術）によって私達の世界に導入される新しい尺度に起因するのだ。話し言葉というメディアは、「書き言葉」が誕生した時、伴って生まれた「記録として残り存在し続ける」という新しい価値観（尺度）のもとで、個人・社会に結果を及ぼすのだ。こうしたメディア同士の相互作用の影響力に私たちは大抵気づかないが、その影響力はとても大きい。「内容」「情報」といった通常の意味でのメッセージは、メディアそのものよりもはるかに重要度が低いのである。

## 2) 「人類は3つの時代を生きてきた」

マクルーハンによれば、人類は「文字を持たない部族的時代」「グーテンベルクの時代」「再部族化された人間の電子時代」の3つの時代を生きてきたという（ゴードン、2001：37 - 41）。

15世紀半ばのグーテンベルクの活字発明が導いた活版印刷技術は写本文化の終わりと書き言葉の民主化を意味する。さらに書き言葉の機械化を導き、ひいては民族主義と民族語の確立を促進したとマクルーハン論じる。なぜなら当時の国際的言語だったラテン語の印刷物への需要は、全印刷業者の市場を満足させるのに十分な量がなかったため、必然的に業者は多言語（＝民族語）の印刷の仕事に取り組むこととなったからだ。技術の進展により、個々の読者に行き渡るほど大量の本を作れるようになると、印刷という新メディアは、私的なアイデンティティの観念をもたらし、それまで実現不可能だったレベルの言語の標準化を強制するに至った。これが「グーテンベルクの時代」である。活字の言葉が王的存在であり、目（＝視覚）が女王的存在である時代だ。

ところで、発明以前、すなわちアルファベット（＝書き言葉）の普及以前は人間同士のコミュニケーションは全感覚を同時に含んでいた。語りには身振り手振りが伴い、見ることと聴くことの両方が求められた。これが、話し言葉が王的存在で、聴覚が女王的存在である「文字を持たない部族的時代」だ。この種のコミュニケーションの即時性と豊かな複合性は、アルファベットによって抽象的な視覚的記号に縮小されてしまった。聴覚・触覚・視覚などのあらゆる感覚・情感に満ちた世界を、書き言葉は、有限で秩序立ち、構造的で合理的なものに変えて

しまったとマクルーハンは述べた。グーテンベルクの活字発明は、線的で画一的で連続的、継続的な理解の仕方を人間に強制したのである。

そして、線的な思考は、産業や学問、技術の進展ももたらした。その進展の結果が現代の高度な電子テクノロジー社会である。今や、脳内（＝肉体）の電気化学的エネルギーによる活動は、コンピューターの電磁的エネルギーが担っている。肉体は機械的に変形され、それはすなわち人間の意識の変形も意味する。私たちは、個人・組織・国家・企業といったあらゆるカテゴリーにおいて、情報システムに組み込まれてしまっている。これがあらゆる感覚・あらゆる存在の序列が廃されコンピューターという王宮の権化となった「再部族化された人間の電子時代」である。コンピューターという強烈なテクノロジーは、あらゆるものを変形し、私たちの知識を蓄える。それによって人間の健康な肉体すら情報システムの中に組み込まれ、コンピューターの中に永久に消えてしまうのではないか。マクルーハンは、このような時代の変化を危惧し、急速な電子メディアへの移行が人間の感覚比率（五感のあいだの関係）を変化させ、究極的には感覚が身体から切り離されると警告している。（ゴードン、2001：67 - 69、81）例えば、コミュニケーションにおける文字の発明は、五感における視覚の重要性（＝比率）を相対的に高めたといえる。コンピューターという電子メディアの登場とそれへの移行は、中枢神経系の電氣的拡張を意味し、それまで「意識」として私たちの身体の内存在していたものを機械の中へと切り離す、すなわち感覚の身体からの切断であるのだ。

### 3) メディアとしての文房具

メディアは「人間の拡張」であり、メディアは別のメディアの内容となり、メディアはメッセージであるとマクルーハンは述べた。その点において、文房具は人々の内なる意識や考え、アイデアを形にする拡張の道具であるため、メディアである。加えて、円環図で示した文房具の定義は、まさにあるメディアが別のメディアの内容となっている様子を示すものであり、シーン別で定義することは、メディアがメッセージであり、新たな尺度が導入されていることを示している。例で示したスチールラックが文房具というメディアだと定義されるとき、それは「書くもの／書かれるもの／加工するもの／加工されるもの」という「メディア」が収納されることで、人がこれまで物理的に抱えきれなかった量のものの保持を可能にし、それによって人の財産（所有物）への欲が拡大したという「メッセージ」なのだ。

そして、マクルーハンは、急速な電子メディアへの移行が人間の感覚比率（五感のあいだの関係）を変化させ、究極的には感覚が身体から切り離されると警告していた。現代では、パソコン・スマートフォンの普及にともなって、データ化

できるメモ帳のようなデジタル式文具が登場している。まさに、アナログから急速な電子メディアへの移行と、それに伴う身体からの感覚の切断が進みつつあるのだ。

ところが先述したデジタル式のメモ帳は、あくまで手書きのメモをデータ化するものである。そして、まだまだ教育現場では鉛筆や黒板・チョークが使われ、手書きの手帳の需要も高い。デジタルな時代の中で、あくまでアナログな状態で留まり続けているのだ。そんなふうに揺れ動く存在である文房具は、デジタルとアナログの世界の境界線で人間の感覚比率のバランスを保つメディアであるともいえる。さらには、文房具自体が歴史的・文化的存在であると同時に、書物といった歴史や文化を生み出すという意味で「文房具は文化メディアである」と言えるのだ。ここにいう「文化メディア」とは、「文化を産み伝える文化」であり、「情報をはこぶ単なる媒体（＝メディア）ではなく、それ自体が何かを生み出す文化でもある媒体」のことを指している（奈良女子大学文学部人文社会学科文化メディア学コース HP による）。文房具は、人が用いる単なる道具ではない。それ自体が文化でありメディアでもある存在だからこそ、テレビや雑誌といった各種媒体でも盛んに取り上げられるほどの魅力があるのだ。

### 4. おわりに

本章では印刷文化史を中心に世界史を見直し、文房具の歴史をまとめ、そこから文房具の定義やメディアとしての文房具の存在について考察した。身近で当たり前すぎて意識してこなかった文房具が、実は「文化と歴史の覗き窓」であり「文化メディア」でもあるという奥深さに少しでも気づいていただけたなら幸いである。

#### 【注】

- i) ただしパピルスは植物の茎の繊維を割いて貼り合わせ、圧縮・乾燥させたもので現在の紙とは全く異なるものであった。
- ii) 同時代に毛筆が発明されたとされる。
- iii) スペイン・フランスが12世紀、イタリアが13世紀、ドイツが14世紀、イギリスが15世紀、オランダが16世紀。製紙法が伝わるまで、先述のとおりヨーロッパでは羊皮紙が使われていた。
- iv) 本図は西美沙紀氏のアイディアによる。

#### 【参考文献】

庄司浅水、1980、『定本 庄司浅水著作集 書誌篇 第5巻 印刷文化史』出版ニュース社

## 第1章 メディアとしての文房具—歴史・定義・機能—

- 庄司浅水、1982<sup>a</sup>、『定本 庄司浅水著作集 書誌篇 第9巻 世界印刷文化史年表』出版ニュース社
- 庄司浅水、1982<sup>b</sup>、『定本 庄司浅水著作集 書誌篇 第10巻 日本の書物』出版ニュース社
- 杉浦克己、1994、『書誌学・古文書学—文字と表記の歴史入門—』放送大学教育振興会
- 鈴木敏夫、1976、『ブレ・グーテンベルク時代 製紙・印刷・出版の黎明期』朝日新聞社
- 三菱鉛筆社史編纂室、1986、『時代を書きすすむ三菱鉛筆 100年』三菱鉛筆
- Marshall McLuhan, 1964, *Understanding Media : The Extensions of Man*, McGraw-Hill (マーシャル・マクルーハン、1987、『メディア論 人間の拡張の諸相』栗原裕・河本仲聖訳、みすず書房)
- Terrence Gordon, W.1997, *McLUHAN FOR BEGINNERS, Writers & Readers* (W・テレンス・ゴードン、2001、『マクルーハン』宮澤淳一訳、筑摩書房)

### 【参考 URL】

- ・奈良女子大学文学部人文社会学科文化メディア学コース HP :  
[http://www.nara-wu.ac.jp/smt/faculty\\_bungaku.html](http://www.nara-wu.ac.jp/smt/faculty_bungaku.html)

奈良女子大学文学部人文社会学科文化メディア学コース編  
(2012 年度後期「文化社会学演習」報告書)

## 『文房具—ぶんど大学への招待—』

---

2013 年 8 月 12 日発行

編集・発行 奈良女子大学文学部 人文社会学科  
文化メディア学コース (小川研究室)

---

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 電話&FAX 0742-20-3259  
E-mail ogawax@dream.com

---

印刷 株式会社 実業印刷